

巻頭言

「観」を養う土台づくり

岐阜大学地域科学部／若者支援全国協同連絡会 南出 吉祥

「子ども・若者の労働観」というお題をいただいたが、これはなかなか難しいテーマである。主要には「〈労働〉とは何か」ということに対する子ども・若者たちの認識が問われてくるのであるが、それ以前に「子ども」「若者」という括りがどこまで成立するのかという問題もある。たとえば「若者」と一口に言っても、労働が生活の主たる部分を占めている者／学校や家事・育児、市民活動などを主にしながらパートタイムで働く者／いまだ働いた経験（賃労働）のない者／失業・無業状態にある者などなど、労働にまつわる属性だけで見てもかなり多様なありかたが想定される。そしてそれぞれの生活環境とその実態によって、労働観も大きく異なってくるのは自然な流れでもある。また子どもたちにしてみても、身近に接する大人たち（とりわけ親・家族）の労働の様子に大きく規定されるものとなるであろう。

「子ども」「若者」という括りの過度な一般化の危うさは、労働観の問題に限らず普遍的なものとしてあるが、とりわけ日常生

活（および家庭的背景）にも深く結びついた労働観ということについては、なおのこと注意が必要である。本誌8月号特集でも指摘されていたように、「労働」について公的にきちんと学んだり、多様な労働実態に触れる機会も制約されていたりするなかでは、労働観の形成は日常場面で身近に接する労働（そこには、メディアも含めた「労働語り」ももちろん大きく影響する）に強く規定されるものとならざるをえない。その前提をまずは押さえておく必要がある。

他方で2000年前後くらいから、学校現場でも「キャリア教育」という形で労働観形成にかかわる教育が実施されるようになってきた。「キャリア教育」についての是非は、その内容も含めさまざまな議論があるが、ここでは「労働観」という部分にかんする偏り・危うさを指摘しておきたい（もちろん、それらを乗り越える実践もさまざま展開されているが）。

そもそも日本的な「キャリア教育」は、1990年代以降進められていった労働市場（雇用慣行）の構造変容に即して生み出され

てきた正社員抑制および不安定就労の増大への対応として始められたものであった。そのため、「就職」ということが前提に置かれた教育になりがちで、「どうすれば就職できるか」「働けるようになるには何が必要か」「自己の適正はなにか(自己分析)」などの技術的な問題のみに向かってしまう傾向が今でも強い部分がある。そうした状況下で、「〈労働〉とは何か」「そもそもなぜ働くのか」といった根源的かつ正解のない「問い」を掲げ、探求していくという作業は傍流に置かれている。

また、学生との対比で多用される「社会人」という用語もかなり問題含みである。この言葉は外国語に訳せないが、内実としてはかなりの程度「ビジネスパーソン」が想定されている。その問題性としては、まずそもそも、子どもや学生であっても社会の構成員であるにもかかわらず、この語をかれらに対比させてしまうことで、「社会」の外側に子ども・若者たちを追いやってしまう効果が生じる。そして「社会人」が想定する労働の内実も、農業や工場労働というよりは、ホワイトカラー職種を中心にイメージされがちで、家庭内労働はほぼ排除されている。さらに「学生／社会人」と二分法的に捉えてしまうことの余波・派生として、「アルバイトと正社員とはまったく別物」という認識が広がっていたりもする。どちらも労働(労働力の提供)の対価として賃金を受け取るという労働契約に他ならず、同じ「労働者」であるにもかかわらず、である。いずれにせよ、「社会人」と

いう言い回しは、日本における「社会」≡「会社」という構造(日本型企业社会)を端的に象徴している用語法なのである。

では、「労働観」はどのように形成されていく(べきな)のか。それを考える際、まず注意せねばならないのは、冒頭にも示したように、たとえ子どもであっても、日々の日常生活のなかで何かしらの労働イメージは形成されており、ゼロからのスタートになるわけではない、という点である。それをより広く、深いものにしていくためには、既に形成されているその労働観をなんらかの仕方で揺るがし、場合によっては砕いた上で自分なりに再構成するという作業が必要になる。そこで筆者が行なっているのは、日々の日常風景を異化して捉えてみるという作業と、一般的な労働イメージとは異なる働き方をしている人びと・現場と出会わせる、という作業である。

まず前者については、「出資／経営／労働」の区分を乗り越えるという協同労働の理念はまさにうってつけだが、「生産／消費」の区分を超えるという概念を日常場面に照らして提起してみることもある。すなわち、「モノを買う消費者は、そのモノを生産する労働を生産する」という論理である。この論理を敷衍していけば、「〈そこに生きている〉ということ自体がなんらかの労働を生み出している」という地平までたどり着き、優生思想や固体主義的能力観を超え出ていく回路を提供しもするだろう。

とはいえ、上記のような概念的アプローチは、どうしても机上論に終始しがちで、

リアリティに乏しいものとなる。そこで、実際に上記のような活動を実践している人たちや実践の場に出会わせ、直接的・直感的にかれらの労働観に揺さぶりをかけていくことも機会を見て実施している。そこで感じる動揺や違和感は、それぞれ個々の家庭環境や成育歴によりかなりの幅が出てくるが、そこで生じる差異が可視化され共有されることにより、それまで自明のものとしていた個々の「労働観」がいつそう揺らぎ、幅広いものとなっていく。実際には、時間的・物理的制約もあるためそううまく段取りを組めるわけではないが、日常生活あるいは教育の場から「労働」が切り離され、出会いや経験の幅が限定されがちな現代社会においては、大事にしたい活動である。

いずれにせよ、労働観をはじめとする「観」(パースペクティブ)というものは、個々人の価値観に直結するものであり、一律的な教授—学習プロセスにはなじまない。だからといって、自然に任すままにしているだけでは、およそ偏った情報・環境の力に翻弄されるままになってしまう。そこで必要となるのは、多様な働き方の現実と出会い、そこで生じた問いを他者ととともに深めていく作業・経験の保障である。「人はそれぞれ多様である」ということと、「そんな人びととともに生きていく」ということ。そうした原点にまで立ち返りながら、「労働」という営為を見つめ直してみることが一般化したならば、そこからどんな社会が生成されていくことになるだろうか。